

令和4年度継続課題に係る継続評価書

研究機関 : 凸版印刷(株)、(国研)情報通信研究機構、(株)インターグループ、マインドワード(株)、ヤマハ(株)、フェアリーデバイセズ(株)

研究開発課題 : 多言語翻訳技術の高度化に関する研究開発

研究開発期間 : 令和2年度～令和6年度

代表研究責任者 : 糸谷 祥輝

■ 総合評価 : 適 (適/条件付き適/不適の3段階評価)

(評価点 20点/25点中)

(総論)

今年度の研究開発目標を達成見込みであり、有用な取組が多く行われていること、社会実装のための実証の基礎ができていること、実施体制の再構築により前回指摘事項が改善されていること等から、引き続き推進することが適当である。

なお、実証においては、システム側だけではなく、ユーザの観点からの評価にも注力すること。

(被評価者へのコメント)

- 今年度における研究開発の目標達成(見込み)がなされており、着実に成果を挙げている。
- チャンク分割や、分からないことを話者に伝える技術等の有用な取組が多く、評価できる。
- チャンク分割により翻訳が早くなったことは評価できる。
- 社会実装のための実証試験の基礎が固まったと感じる。
- 前回の指摘事項の大部分は実施体制の再構築によって改善されている。
- これまでに得られた知見をフィードバックし、来年度以降に活かしてほしい。
- 各実証分野における評価においては、質的な評価も十分行うとともに、システム側からの評価だけではなく、ユーザの観点からの評価に注力すること。

(1) 当該年度における研究開発の目標達成(見込み)状況及びアウトカム
目標の達成に向けた取組の実施状況

(5～1の5段階評価) : 評価4

(総論)

目標は全ての項目で達成済み又は達成見込みであり、計画通り順調に進展している。複数の大規模実証において、当該技術の有用性を示した点を評価する。一方で、学術的観点からの深掘りや、社会実証における質的評価が弱いため、更なる取組を期待する。

(被評価者へのコメント)

- 目標は全ての項目で達成済み又は達成見込みであり、特に定量的な目標はほとんど達成しており、社会実装への土台が出来たことがわかる。
- チャンク単位でのアノテーションに対応した自動同時通訳エンジンを作成し、動作検証を実施するとともに、アノテーション利用による翻訳精度改善を確認しているが、より大規模な実証データを用いた分析では顕著な有効性を確認できるまでには至っていない。
- 自動同時通訳プラットフォームの可用性向上に向けた検証環境を構築し、クラウドの障害を想定したシミュレーションが行える状況になっている。
- ユーザインタフェースのデザインルール策定や、翻訳精度の補完を目的とした「分からないを伝える」ユーザインタフェースを設計する等、様々な取組が積極的に行われている。
- 社会実証で技術の有効性を示している一方で、学術的観点からはやや深掘りが不十分な点があるようにも思える。質的評価が弱かったため、詳細な報告を期待する。

(2) 研究開発実施計画及びアウトカム目標の達成に向けた取組

(5～1の5段階評価) : 評価4

(総論)

今年度得られた課題を次年度以降の研究開発にフィードバックする計画であり、妥当である。社会実装に向けては、災害時可用性の検討や技術の外部公開計画等があることを評価する。社会実証においては、高い見地からの目的理解等に基づいて、局所化された課題対応ではなく一般的な展開となることを期待する。

(被評価者へのコメント)

- 今年度の研究開発に得られた課題等を翌年度以降の研究開発にフィードバックしており、自然で妥当な計画となっている。
- 災害時の可用性やセキュリティについて考慮する具体的計画もあり、評価できる。
- 開発した技術について、今後の外部公開が計画されている点が評価できる。
- アウトカムに向けての基礎的な基盤が整いつつあり、今後の社会実装に向けた課題が見えたので、引き続きそれら課題解決に努力すること。特に各社会実証分野における本質的に解決すべき問題の同定と、その解決方法及び評価方法について説得力のある結果を期待する。
- 社会実証においては、局地化された課題対応ではなく、より高い見地からの目的理解、これまで提案されている対処策の活用、発見された事柄に基づく、より一般的な展開を期待する。

(3) 実施体制

(5～1の5段階評価) : 評価4

(総論)

各分野のエキスパートである組織が多数参加しているほか、実施体制の再編により、研究開発グループと社会実証グループ間の風通しがよくなっており、適切な体制が組まれている。研究者と社会実証の現場との間で一層の有機的な連携を図り、研究者において社会実証の先までにとらんだ対応を期待する。

(被評価者へのコメント)

- 各分野のエキスパートである組織が多数参加しており、適切な体制が組まれている。
- ワーキンググループの体制見直し、実施体制の再編等により、研究開発グループと社会実証グループ間の風通しがよくなったことがうかがえる。
- 本研究開発は研究者と社会実証の現場との間の良い連携の場であり、この場を使ってもっと有機的な連携が図られるとよい。研究者にとってはシステムを提供するだけで精一杯かもしれないが、それを超えた先までにとらんだ対応を期待する。